

私の研究



災害とキャリア

～女性のキャリア意識の変化～

中村 暁子 (なかむら ときこ)

東日本国際大学 経済経営学部
特任講師



1. はじめに

近年、女性のキャリアは大きく変化しています。95歳を迎えようとする筆者の祖母は、女学校での教育を受けたり戦争を経験するといった貴重なライフキャリアを経験していますが、家事や育児を担う専業主婦を生業とし、家庭の外で働くことはありませんでした。母は定年退職をして数年になりますが、ワークキャリアの大半を教師として教鞭を奮いました。しかし学生時代の同性の友人たちは大学卒業後に一旦は企業に勤めたものの、結婚や出産といったタイミングで退職する人が多かったと聞きます。一方私の姉は、大学卒業後に企業に就職し、結婚を経ても正社員として働き続けています。当の私は大学を卒業してから一旦は就職したものの、大学生時代に抱いた大学院での研究活動への憧れを捨てきれずに退職し、現在の研究・教育職に就きました。

このように女性のキャリアは近年多様化しつつあります。祖母の時代は「女性が教育を受けるな

んて」といった時代だったようですが、近頃は年々女性の4年制大学への進学率は上昇していますし、女性の大学院への進学者も非常に多くなっています。また、母の時代に遡ると、出産や結婚などのライフイベントに従って退職し、子育てなどがひと段落した頃に就労を再開する女性の姿が多く見受けられます。こういった女性の就労状況の波をM字カーブと呼びますが、近年ははっきりとしたM字を描くというよりもM字の谷が穏やかで、台形に近い形を描くようになっています。これは以前よりもライフイベントに左右されることなく女性がライフキャリアを歩むようになってきていることや、「男は外、女は家」というような伝統的な働き方や価値観が変化する大きな流れの中にあるようです。

こうした女性の多様な「キャリア」はどのように生まれるのでしょうか。社会的な構造、価値観の変化がその理由としてあるでしょう。また、一人ひとりのキャリアの中にストーリーがあり、転換点となる出来事を通して、キャリアの変更を希

望するようになったり、キャリアの変更を余儀なくされたりするのだと考えます。

この「キャリアの変更に関する出来事」について、特に災害などの大きな出来事が起きたときに、女性はキャリアに対してどのような不安や期待を抱くのか、ということを考えてみました。

2. 災害とキャリア

東日本大震災から6年が経過した2017年の3月11日、朝日新聞福島県の地方面に県内の被災地の市町村長の皆さんのインタビュー記事が掲載されていました。市町村長の皆さんの言葉は、当時の被害の大きさよりも、時間が経過してからの被害の大きさを物語る言葉が多いことがとても印象的でした。その中でも特に印象的だったのが、「地元を支える人材の育成に困難性を抱える」という声です。例えば、福島第一原子力発電所の事故により、住む場所の変更を余儀なくされた方がいらっしやることを挙げ、生まれ育った地域への帰宅が困難なことを指摘しているのです。また、大震災そのものや風評被害によって倒産・廃業した会社で働いていたことが原因で継続就労が困難になったことなど、震災によってキャリアを強制的に変更しなければならなくなった人々は少なくないということです。こういった状況に対して、大災害に直面した経験のない私の想像力では寄り添うことができないもどかしさを感じました。

インタビュー記事から、また経験からも、このような予測不可能な災害を経験することはワークキャリアやライフキャリアのどちらにも影響をもたらすものであることは容易に想像することができます。災害は人々の考え方や価値観を変更させる影響力を持ちますし、住む場所や働く場所を失うといったきっかけにもなるからです。キャリア研究の中にはエドガー・シャインが提唱した、キャリア上の譲れない確たる信念を表すキャリア・ア

ンカー (e. g. Schein, 1993 訳2003) という概念がありますが、大災害に直面することにより、キャリア・アンカーが変更になった可能性も推測することができます。

既存の大災害とキャリアに注目した研究には、例えば上野山・櫻田 (2016) の研究がありますが、キャリアの研究においてはまだまだ研究の蓄積は乏しく研究の余地が残るものでした。この原因には東日本大震災をはじめとする数々の災害の被害があまりにも苛酷なものであり、個人レベルでの経験を吐露することが困難であったことや、そもそもそのような声を容易に収集することができるほど個々人の心理的な復興が進んでいないことによるものだと考えられます。

その一方で、日本は世界屈指の災害大国であることから、人々のキャリアと災害の関連性について研究が進むことはとても価値のあることだと考えます。そこで2020年に、いわき市の女性たちのキャリアが東日本大震災によってどのように変わったのかという点を明らかにするために、地域の起業家や女性事業家に精通した中小企業診断士の方に対する探索的な調査を実施しました。

3. いわき市の女性のキャリアと震災

調査の結果、東日本大震災はいわき市に住む女性のワークキャリアに対する意識の変化をもたらしただけでなく、実際にキャリアを変更するきっかけとなったことが明らかになりました。

震災それ自体やその後の風評によって事業が困難になり、事業内容や事業の方向性の転換を余儀なくされたこと、それに伴い事業主や雇用者がキャリアの選択を変更せざるを得ない状況は、想像に容易いことです。しかしいわき市の女性はこういった状況に悲嘆するのではなく、チャンスと捉えんばかりに新しいキャリアに乗り出すのです。例えば震災後、自分の職場や関連する会社が苦境に立

たされたこと、廃業・倒産の現実味が帯びる中で雇用やワークキャリアの継続に対する不確実性やそれに起因して生じた生活に対する不安から、起業という新しいワークキャリアを選択をした女性の存在があったのです。特に、彼女たちは自分の感性や得意なことを活かした事業を行っているという点がとても印象的でした。確かに、いわき市には女性が店主の個性あふれるお店が多いように感じます。またそういったお店を訪れて彼女たちと会話をすると、不思議と元気をもらうような気持ちになります。

こうした女性の存在は、これから起業を目指す未来の女性事業家たちのロールモデルとして大変価値ある存在ですし、地方の活性化という面でも可能性を秘めた存在です。しかし、彼女たちが安心して起業をして事業を行う上でも課題があります。起業には様々な手続きが必要となりますが、一生のうちに起業を何度も経験する人は多くはありませんので、どのような手続きで事業を始められるか、継続できるのかという点に不安のある方が多いようです。調査でも、いわき市の女性起業家たちも例外ではなく、正しい諸手続きを行うことが困難となっている姿が描かれました。したがってこのような存在をサポートする機関や、彼女たちの拠りどころとなる場所の活性化が求められると考えられます。

いわき市の女性たちの震災とワークキャリアについて検討を行いました。①震災は女性のワー

クキャリアを奮い立たせるような変化をもたらすきっかけとなること、②女性の起業家たちへの支援の必要性が明らかとなりました。しかしその一方で今回の調査だけでは、彼女たち一人ひとりのストーリー、特に震災によってどのような気持ちの変化があったのかというプロセスが描けておらず、これからの研究において余地のある点です。今後は彼女たち個人の経験やストーリーに着目して声を集めるような研究・調査を実施し、キャリア研究と地域に貢献したいと考えています。

参考文献

Schein, E. H. (1984). Culture as an environmental context for careers. *Journal of Occupational Behaviour*, 5 (1), 71–81.

Schein, E. H. (1993). *Career anchors: Discover Your Real Values*. San Diego: University Associates. (金井壽宏訳『キャリアアンカー—自分のほんとうの価値を発見しよう』白桃書房, 2003年)

Schein, E. H., & Maanen, J. V. (2016). Career anchors and job/role planning. *Organizational Dynamics*, 45 (3), 165–173.

上野山達哉・櫻田涼子 (2016). 自然災害によるワーク・キャリアの再体制化とイナクトメント—東日本大震災被災地事業所従業員のケースをもとに—. 『商学論集 (福島大学)』, (84) 3, 37–52.

<プロフィール>

1990年生まれ。2012年明治大学経営学部卒業。2018年明治大学大学院経営学研究科博士前期課程、Solbridge International School of Business MBA コース修了。大学を卒業後、地方銀行に就職したが、女性の活躍する組織を目指す社会的な動きと実際の組織における実践に課題を感じ、大学院へ進学。現在は女性の組織における垂直上方向のキャリア形成など、組織とジェンダー、キャリアに関する研究を行っている。